

婚礼の創造—商業主義的婚姻儀礼は「真正なる通過儀礼」になりうるか—

関西学院大学大学院博士後期課程 1 年 道前 美佐緒

1. 研究の目的

本研究は、商業主義的社会の中で著しく変容する日本の婚姻儀礼が「真正なる通過儀礼」になり得るのかという問いに対し、1955 年から 2022 年までに自身の結婚式を体験した女性のライフストーリーから婚礼様式の変遷を辿り、当事者である花嫁が自らの結婚式をいかに評価しているのかという視点で、儀礼の意味づけを明らかにするものである。

2. 問題の背景

現代の儀礼研究では、外部化・西洋化した披露宴が「非真正なもの」とみなされ、研究対象から外されている。しかし、「真正／非真正」を決めるのは誰か。現在の儀礼研究には、儀礼当事者の主観的な感情や評価への視点がかけているのではないか。

1955 年	日本の「生活革命」[色川 1986: 57] の起点 婚礼の外部化
1969 年	旧総理府（現内閣府）「標準世帯」（こども 2 人の 4 人家庭）
1972 年	日本の婚姻組数 109 万組 団塊世代結婚適齢期 ホテル・式場での画一的な神前結婚式と披露宴のセット販売
2020 年	西洋化：51.7%が教会式（西洋の教会を模倣したチャペル） 28.5%が人前式（法的効力の無い結婚証明書）

リクルートブライダル総研『ゼクシィ結婚トレンド調査 2020』

https://souken.zexy.net/data/trend2020/XY_MT20_report_06shutoken.pdf 2021.8.1 取得

3. 伝統・文化の「真正性」の議論

「客観的真正性」を問う議論＝歴史的事実の正当性、教義の正統性など

ホブズボウムが、19 世紀のナショナリズムによる伝統の創造を論じて以来 [ホブズボウム・レンジャー 1983]、英国王室のページェントや [キャナダイン 1983]、ビクトリア女王の婚姻儀礼の成立過程 [坂井 1997] の他、日本の皇室の婚儀と民間の神前結婚式などの成立過程と社会との連関を問う議論 [イラリア 1998] がある。

「主観的真正性」を問う議論＝儀礼に参加する人々の主観的な意味づけ

現時点でそれを行う人達にとっては、過去に直接遡ることのできる他の文化遺産と同じように、それは強さと意味を持っている。(略) 何が本物かは、常に現時点において定義される。あるものを伝統的と決めるのは歴史性や伝承ではない。伝統は、恣意的で象徴的なものを示し、客観的な特質というよりも人々が与える意味なのである。[ハンドラー・リネキン 1984=1996:149]

伝統や文化が「本物か／偽物か」を問う議論は、主に、観光現象研究において蓄積されてきた。儀式や祭りの成立過程や構造を明らかにし、その歴史性や教義の正統性を問う「客観的な真正性」を検証する立場に対し、現時点において、それを体験する人々の主観的な評価や意味づけを問う「主観的な真正性」を考察する立場がある。

後者の視点で、橋本和也は、人々の主観的な評価を検証する新たな基準として、人々の交流の中にある「真摯さ・誠実さ」[橋本 2011:78] という価値に焦点を当て、「真正な体験」は、「人と人の絆」や「自己のアイデンティティ形成」を確認することで構築され、誰かにものがたることによって再構築されると論じている。

そこで、本研究では、ブライダルビジネスによる「演出された舞台」としての儀礼空間や儀礼行為の客観的真正性と、そこで結婚式を行う人々の感情や自身の儀礼体験への評価という主観的真正性の両面を分析した。

4. 研究手法 ライフストーリー

調査は、愛知県を調査地として、2020年8月から2021年5月までに14人19例の婚礼についてインタビューを行った。語り手と聞き手の発話を全て書き起こしたスクリプトを基に、母娘2代、3代にわたる婚礼体験も含め、20代から80代の女性の結婚式とその前後の暮らしを含むライフストーリーに組み立て、婚礼様式の変遷を確認するとともに、婚礼体験が当事者によっていかに意味づけられ、その後の人生にどのように機能したのかを検証した。

5. 本論

1) 演出された舞台

ホテル・式場での画一的な婚姻儀礼を体験したNo3からNo6の女性の語りを中心に分析を行った。表1のとおり、No3からNo5の事例は、新居住婚で、女性は結婚後専業主婦となり、No6のみが共働きである。儀礼の形式は、4名とも酷似しており、結婚の申し入れから荷入れまでは伝統的な婚礼風習を保持し、ホテル・式場で神前式と披露宴を行っているが、No6のみはキリスト式を選択している。(表1)

表 1 婚礼様式の変遷

	語り手	No3.	No4	No.5.	No.6.
プロフィール	結婚年	1971(昭 46)	1981 (昭 56)	1990 (平 2)	1996 (平 8)
	結婚時年齢	25 歳	22 歳	25 歳	26 歳
	夫職業	公務員	家業継承	会社員	会社員
	妻婚前職業	家業手伝い	大学生	会社員	会社員
	妻婚後職業	専業主婦	専業主婦	専業主婦	勤務継続
	馴れ初め	チュウニン	見合い	恋愛	恋愛
	新居	夫婦のみ	夫婦のみ	夫婦のみ	夫婦のみ
地域の婚礼風習	申し入れ	仲人連れ	仲人連れ	仲人無	仲人無
	結納式	嫁家	キャッスル H	嫁家	料亭・賀城園
	結納返し	無	同時返し	式無・時計	婿家（奈良県）
	荷入れ	有	無	有	無
	出立	有	無	無	無
義 商業主 婚 主	会場	都 H	キャッスル H	クレール	名古屋観光 H
	挙式形式	神前式	神前式	神前式	キリスト式
	招待客数	約 90 人	約 400 人	約 80 人	約 80 人
	衣装着数	3 着	4 着	4 着	2 着
	披露宴	立礼			
		入場			
		媒酌人挨拶			
		主賓祝辞			
		ケーキ入刀			
		乾杯			
		中座			
		再入場			
		両家代表謝辞			
		門出			
		立礼			
	二次会	無	有	有	有
	新婚旅行	箱根	ドイツ	オーストラリア	ヨーロッパ周遊

当時の結婚情報誌などと照合してみると、ブライダルビジネスによって、「誰もが同じライフサイクル」に対し、「同じ儀礼・演出」が創造されていることがわかった。これは、ホブズボウムの「伝統の創造」における3つの様相（演出的な形式・階級意識を示す記章・伝統を利用した世論操作）を含んでいるといえる。ホテル・式場での豪華でありながら大量生産可能な結婚式と披露宴は、富裕層からサラリーマン家庭にまで伝播し、中流階級の記章として、商業主義的意図と政治的意図を含んだ世論操作に利用されたともいえる。1969年に、旧総理府は、家計調査に「標準世帯」（子ども2人の4人世帯）を導入したが、それは、性別役割分業型家族を想定したものであった（岩本 2021:133）。ホテル・式場が創造した「子どもから花束贈呈」などの演出や、新婦が静々と新郎の後を歩く型通りの儀礼は、「標準世帯」を表象するものであり、それを見た参加者からも「外で働く夫と家で支える妻」への期待が新郎新婦へ寄せられていた。商業主義的婚姻儀礼は、「標準世帯」への転換装置であったのだろうか。儀礼当事者は、儀礼の中で、身分移動をどのように認識し、周囲の期待にどのように反応し、儀礼をどのように意味づけていたのかを確認した。

2) 披露宴の中の「交流の質」

ライフストーリーを分析した結果、花嫁達が演出された舞台に反発し、あるいは、従属的でありながらも、儀礼を通して自身の身分移動を認識し、アイデンティティを形成していった過程を確認できた。

彼女達が婚姻成立を認識したのは、入籍でもなく、結婚式における宗教的な儀礼でもなく、人々の顔が見える披露宴であった。彼女たちは、披露宴における「おいたちビデオ」や、司会者からのインタビューを通して、自分たちのことを参加者に理解してもらうことができ、わずかな時間でも参加者に挨拶をしたり、言葉を交わしたりしたことに満足をしていた。また、「両親への花束贈呈」は生家との別れの儀礼として意味づけされ、そのなかで、自分の声で、皆の前で、親への感謝と尊敬の想いを伝えることが重視されていた。ブライダルビジネスが用意した型にはめられながらも、その隙間から現れ出た自己と、それに対する周囲の反応を鮮やかに想起し、人々の中で育まれた「自らの生」をものがたった。

3) 一連の婚姻儀礼における「人と人の絆」と、その間にある婚礼の品々

また、かつての花嫁たちのライフストーリーの中で、結納や荷入れなど、一連の婚姻儀礼の中で、婚家との新たな絆を結び、親の愛情を再確認していたことがわかった。その人々の交流を媒介するものとして結納品や婚礼道具があり、そうしたモノは、儀礼の後の新生活に持ち込まれ、彼女たちの人生の節目に現れては、思い出を想起させるリマインダーとなっていた。結納品のサラシは腹帯となり、生家の家紋を染

め抜いてもってきた留袖は息子の婚礼の晴れ着となる。こうしたリマインダーとしての婚礼記念品が「あのとき—あの場の」真正な婚礼体験を想起させ、「いま—ここに」親と子の命の連鎖の中にある通過儀礼として再構築されていた。

4) 再構築される婚礼体験

婚礼体験は、想起され、語られるたびに、当事者である彼女とその家族達の成長によって再評価されていた。現在の幸福感や自己肯定感が、自らの婚礼体験の真正性を担保しているといえよう。体験は、語る時点での価値観で評価され再構築される。花嫁たちは妻となり、母となり、職場や地域社会で地位を築いてきた。そのような人生を送ってきた彼女たちが鮮やかに想起するものがたりによって、婚礼体験は真正性を獲得したといえる。

5. 結語

商業主義的婚姻儀礼は、演出された舞台であるが、そこでは人々の真摯な交流が営まれ、さらに、そのものがたりの主人公の生きられた経験の中で真正なる通過儀礼となると結論づける。

参考文献

イラリア・シニョリーニ 一九九八 「神前結婚式の起源と普及を巡って——明治期における民衆と皇室を中心に」『儀礼文化学会研究紀要』儀礼文化学会

色川大吉 一九八六 「『昭和史 世相編』の構想」谷川健一編『現代と民俗——伝統の変容と再生』日本民俗文化体系第十二巻 小学館

岩本通弥 二〇二一 「変わりゆく家族のかたち——親族とのつながり」岩本通弥・門田岳久・及川祥平・田村和彦・川松あかり編『民俗学の思考法——〈いま・ここ〉の日常と文化を捉える』慶應義塾大学出版会

Cannadine D. 1983 [1992] *The Context, Performance and Meaning of Ritual: The British Monarchy and the 'Invention of Tradition', c. 1820-1977*, Hobsbawm, E & Ranger, T, (ed.), *The Invention of Tradition*, Cambridge University Press. (「コンテキスト、パフォーマンス、儀礼の意味—英国君主制と「伝統の創出」一八二〇—一九七七年」『創られた伝統』辻みどり・三宅良美他訳 紀伊国屋書店)

坂井妙子 一九九七 『ウェディングドレスはなぜ白いのか』勁草社

橋本和也 二〇一一 『観光経験の人類学——みやげものとガイドの「ものがたり」をめぐって』世界思想社

Handler, R. & Linnekin, J. 1984 [1996] Tradition, Genuine or Spurious. *Journal of American Folklore* 97 (「本物の伝統、偽物の伝統」『民俗学の政治性—アメリカ民俗学 100 年目の省察から』岩竹美加子訳 未来社)

Hobsbawm, E. & Ranger, T. (ed.), 1983, *The Invention of Tradition*, Cambridge University Press.